

仮想通貨をガバナンスするのは誰か？

俣個人の見解としては、仮想通貨やICOにはある程度のガバナンス（統治）が必要だと考えているのですが、それが国家による規制や干渉では意味がありません。ヒントになりそうなのが、インターネットにおける地球規模の調整機関となっている

「ICANN (Internet Corporation for Assigned Names and Numbers)」です。非営利の民間団体である彼らは、インターネットのドメイン名、IPアドレスとポート番号の割り振りや割り当てを全世界的に行っています。

「ITU (国際電気通信連合)」は国連の傘下で、国連加盟国にヴァチカンを加えた国家で成り立っていますが、ICANNにおいては国家はいち参加者ではあるけれど、アドバイザリーカウンシルの立場にしか過ぎません。国のものでも企業のものでもないの、ある意味でインターネットの独立したガバナンスを行っている組織だと言えます。

仮想通貨の世界においても、僕はICANNのような非中心的で非営利のガバナンス機関がお手本になるのではないかと考えています。

仮想通貨を支える技術として「ブロックチェーン」が脚光を浴びている。新たなテクノロジーの登場で、インターネットが「デセントラリゼーション（脱中心）」に向かったように、通貨や経済も脱中心へと歩みはじめた。「お金」を介在せずに成り立つ新しい価値はあり得るのか。コミュニティにおける通貨的な価値を持つものは何か。「仮想通貨」と「自然通貨」という2つの通貨を解説し、これからどのように「資本主義」と向き合うべきかを考える。

「ブロックチェーン」とは何か？

仮想通貨を支える技術として、「ブロックチェーン (Blockchain)」に注目が集まっています。仮想通貨の背景にある流れが「暗号化」であることについて触れましたが、ブロックチェーンは仮想通貨の取引データを暗号化して、1つのブロックとして記録、管理する技術です。

取引データがネットワークに参加するコンピュータ上で分散的に管理されるため、イン

ターネットの性質に似ています。日本語では「分散化」と表現されていますが、英語では「decentralization (デセントラリゼーション)」であり、語義からすると「非中央集権化」「脱中心」といった意味になります。

情報を持つコンピュータが一か所に集中せず、複数のコンピュータにより共有される「P2P (ピア・トゥーピア)」であるため、セキュリティを確保することができ、かつ低コストでの運用が可能です。また記録のトレーサビリティが確保されており透明性が高く、暗号化により匿名性が担保されているため、所有権を明確にする必要がある「証券」や「通貨」など金融分野での活用が見込まれる新たなテクノロジーです。

ブロックチェーンを使って「デジタル・アセット (電子的な資産)」の管理ができるようになる。貸付や債券に留まっていた資金の流動性が上がり、お金がもっと投資に向かうでしょう。ただし、いまのところは先に述べた仮想通貨やICOが最も早くブロックチェーンを活用しており、そこに資金が流れています。

## 脱中心に向かう金融と経済

問題は投資家のリスクがはつきりと可視化されておらず、投資というより投機になっていくことです。ブロックチェーンの活用がさらに進み、株式や債権の市場と同じようにトークン発行者が持つデジタル・アセットの実態を投資家が把握できるようになり、いまよりもリスクが減ればお金がもつと動くようになるでしょう。

ブロックチェーンという新たなテクノロジを考えるための視点として、いちばん大切なのは、効率化によりコストが安くなることではなく、インターネットのように「ディセントラリゼーション」に向かうことです。

プロの投資家が投資をして、銀行が企業にお金を貸し付けるといったように、いままでの金融は中心で幅を利かせる「仲介業者」のためにありました。しかし、ブロックチェーンの活用により、企業は投資家から直にお金を集められるようになるため、金融や経済がもつとP2Pになっていく可能性があるのです。

## 通貨はもつと多様であるべき

ビットコインだけではなく、世界には数え切れないほどの仮想通貨が誕生しています。国家が発行する通貨の種類は、地球上で国家が増えない限り、増えることはありませんでした。通貨の種類の上限がある程度、決まっていたと言えるでしょう。ところが、仮想通貨は理論的には無限に増やすことができます。ICOも同じです。トークン(コイン)は誰かが「発行したい」と考え、購入者がいれば増えつづけます。

世の中にたくさんさんの通貨やトークンがあるほうが、国の通貨だけが流通するよりも、世界が変わる可能性があると思います。これは1章で、1つに集中させるのではなく、たくさんさんに分散させたほうが「レジリエンス(回復力、しなやかさ)」が高い、と述べたことと共通しています。人間の社会は、やはり「スケール・イズ・エプリシング(規模がすべて)」ではないと思うのです。

自然界を見渡してみてください。酸素や糖分を使う生き物もいれば、酸素や糖分を廃棄物として出す植物もあります。通貨の比喻として有機体を見れば、その種類の数だけさまざまなプロセスがあり、各プロセスで自分が必要なものと他者が必要なものが違います。

もし地球上に酸素がなくなれば、酸素を使わない生き物が出てくるでしょうし、メタンがなくなれば、それに代わるものが出てくるでしょう。自然界では何らかの違う形で補うバックアップ機能が働き、地球は「レジリエンス」を持って対応するのです。人間も同じですし、経済を有機体として見るならば同じことです。1つの金融装置、1つの基準のままでは、どこかで経済がクラッシュし、機能しなくなるリスクがあると考えられています。

### 「仮想通貨」と「自然通貨」

ブロックチェーンなど新たなテクノロジーの登場により、これから多様な通貨が登場するとしたら、僕は通貨には大きく分けて2つの概念が存在すると考えています。

1つは「仮想通貨 (Virtual currency)」です。本書では、話をわかりやすくするため「暗号通貨 (Cryptocurrency)」と「仮想通貨」をあえて分けず、日本人になじみのある「仮想通貨」という言葉を主に使って記述していますが、英語圏ではビットコインは「暗号通貨」と呼ぶのが一般的です。ここで言う「仮想通貨」は、英語の Virtual (バーチャル) の語

義に近いもので、「仮想」ではなく、「実質的には本物と同じ」という意味になります。

語弊を恐れずに言えば、国家が発行する通貨も「バーチャル」です。例えば、日本銀行が発行する日本銀行券の紙幣は、それ自体に実質的な価値はありません。紙幣を金(ゴールド)と交換できる「金本位制」は、とうの昔に終わっているからです。しかし、国家が発行する通貨はあらゆるものと価値を交換することができ、実質的には価値があるため、通貨であり得ます。

「仮想通貨」という言葉は、すでに2章の説明で多用しており、また、これから広がりが見込まれるデジタル世界との相性が良いため、ここから本書では「デジタル通貨 (Digital currency)」と言い換えて説明をしていきたいと思えます。

そして、もう1つが「自然通貨 (Natural currency)」です。これは、地球のバランスシートのうちでは重要なもので、たとえば森林やマグロなど、要するに「自然資本 (Natural capital)」に基づく通貨です。